

4) 口輪筋等の筋活動

三浦らによる口蓋裂児の咀嚼障害に対する筋電図学的研究では、習慣性開閉運動時の筋活動が、健常者では咬筋にのみみられ、口輪筋は活動していないのに反し、口蓋裂児では、口輪筋にも筋活動が観察されているなど、興味ある知見が得られている。口蓋裂児の上顎前歯部にみられる relapse は、口唇形成手術後の癒痕とそれによる口唇の緊張が原因と考えられていることを裏書きして興味深い。

5) 治療術式の改良

作田は、多発する片側性唇顎口蓋裂の顎の拡大に用いられる Porter expansion 装置についての力学的考察を行ない、lesser segment のみが拡大できるよう改良を加えた。今後大いに臨床応用が望まれる。

柴崎は、劣成長をみせる上顎の前方発育のおさえられている症例に対し、より確実な上顎牽引法を考案し、この治験例について、セファログラムによる検討を行ない、これまで困難とされていた、premaxilla の protraction を容易にした。

唇顎口蓋裂患者における矯正治療の遠隔成績について

—乳歯列期より矯正治療を開始した場合—

東京医科歯科大学歯学部 三浦不二夫

唇顎口蓋裂患者における矯正治療の遠隔成績を調べる目的で、今回はまず、乳歯列期より矯正治療を開始した片側性唇顎口蓋裂患者16名—(UCLP治療群)、および乳歯列期より治療を開始しなかった片側性唇顎口蓋裂患者22名—(UCLP未治療群)、の2つの群を同年齢層の唇顎口蓋裂をもたない一般集団53名と頭部X線規格写真を用いて以下の4項目について比較検討した。

- 1) UCLP治療群、UCLP未治療群における5歳、7歳、9歳時の顎態パターン。
- 2) 7歳から9歳におけるUCLP治療群、UCLP未治療群の成長パターン。
- 3) UCLP治療群中、Chin capを使用した各個体の成長パターン。
- 4) UCLP治療群中、上顎歯列弓拡大装置を使用した各個体の成長パターン。

その結果、次のような結論を得た。

1) 片側性唇顎口蓋裂患者の顎態パターンとして特徴的な骨格性反対咬合は、下顎骨の前方位よりはむしろ上顎骨の後上方位によるものである。この形態学的特徴である上下顎骨の不調和は、5歳前後ではそれ程明らかではなく、加齢と共に顎在化してくる。

2) 片側性唇顎口蓋裂患者の成長パターンでは、上顎骨の劣成長が著明な特徴であり、下顎骨の成長パターンは一般集団のそれとほぼ同じであった。

3) 片側性唇顎口蓋裂患者の治療群と、未治療群の平均成長パターンにおける差異として、治療群に下顎骨後方回転による前顔面高の増大ならびに下顎の後退が認められた。また、上顎については、矯正治療群の方が、未治療群に比し、劣成長が著明であった。

4) Chin capの効果としては、下顎骨の大きさに変化は認められなかったが、下顎の後退ならびに後下方への回転が認められた。

5) 上顎拡大装置による上顎骨の前方成長は、個々の症例によって個体間変動が大きかったが、頭蓋底に対して明らかな前方成長を示したものは少なかった。

以上、片側性唇顎口蓋裂患者における矯正治療に対する反応は、各症例によって極めて変異に富んでおり、個々の症例の形態的特徴を基盤とした治療学の展開をはかることが重要であることが分かった。今後、混合歯列期、永久歯列期より矯正治療を開始した患者の遠隔成績結果をも加え、唇顎口蓋裂患者に対する治療体系の確立が望まれる。

唇顎口蓋裂における難易度判定基準について

— 歯列弓の狭窄の度合からの検討 —

昭和大学歯学部 福原達郎

1. 調査目的

歯列弓の狭窄の程度が歯列の側方拡大における難易度判定基準の一つの目安になり得るかについて調査を行なった。

2. 資料

1) 昭和大学歯科病院矯正科において治療を受付けた Dental age III B ~ IV A の片側性唇顎口蓋裂 (U.C.L.P.) の男女計42名と、コントロール群として Non-Cleft 男女23名、合計65名の初診時石コウ模型を用いた。

2) 対象のU.C.L.P.42名を福原の難易鑑別表により①難症例群(A)②容易症例群(B)③中間に位置すると判断した中間群(C)に分類した。コントロール群(D)には Angle I 級不正咬合症例を用いた。

3. 調査方法

狭窄の程度を知る Index として次の2項目を設定し計測を行なった。計測にはキャリパー (1/20 mm) を用いた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



唇顎口蓋裂患者における矯正治療の遠隔成績を調べる目的で、今回はまず、乳歯列期より矯正治療を開始した片側性唇顎口蓋裂患者 16 名-(UCLP 治療群),および乳歯列期より治療を開始しなかった片側性唇顎口蓋裂患者 22 名-(UCLP 未治療群),の 2 つの群を同年齢層の唇顎口蓋裂をもたない一般集団 53 名と頭部 X 線規格写真を用いて以下の 4 項目について比較検討した。